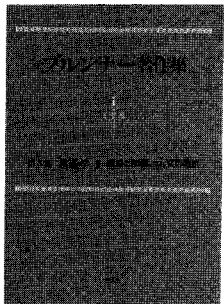


日本は今こそ、このような神学を必要としている

E・ブルンナー著
佐藤敏夫訳

教義学Ⅱ

ブルンナー著作集 第二卷



森本あんり

本書冒頭には、健康上の困難を抱えながらも、この教義学第二卷の執筆をようやく終えて「極東へ」旅立とうとしているブルンナーの「序言」がある。この時点でまだ彼は、その極東旅行が自分の生涯にとってどのような意義をもつことになるのかわからない。ブルンナーはその短い旅行を機に、創立されたばかりの小さな無名の大学からの招聘に応じて二年を日本に過ごすことになる。伝道者・教育者・神学者としてのブルンナーは、戦後日本の若き魂に渾身の力を込めて語りかけ、ために健康を悪化させて帰途インド洋上で倒れるほどであった。多くの読者の期待に堪えて彼が口述筆記による第三卷を出版しこの教義学を完結することができたのは、それからようやく十年後のことである。今、そのブルンナーが立ったのと同じ講壇に立つ者として本書を繕くことは、怖れにも近い光栄である。

ブルンナー教義学の三巻を貫く基本構造は、「神の自己伝達」として理解された啓示である。第一部はその神の自己伝達の内容が本書を見れば明瞭である」と訳者は記しているが、当該箇所の記事はとりたてて言及するほどのものではない。読者にはむしろ、ブルンナーのもっともブルンナーらしいところ、本書の中心課題に正面からぶつかってほしい。それは、言うまでもなくキリスト論である。ことに第十章「キリスト信仰の基礎づけ」は圧巻である。「いかにして人はキリスト者になるのか」「イエスをキリストとして信すべく人間を駆り立てるものは何なのか」——その答えに、「みんながクリスチャンであることが当然である」ような西洋から自覚的に身を引き離して語る、伝道者かつ神学者ブルンナーの真髓があらわれ出ている。日本はかつてにも増して今こそ、このような神学を必要としている。

なお、本書は帯にも大書されているように、ブルンナー神学の要である「われとなんじ」の出会いの真理を各所で下敷きにしている。もしそうであれば、この著作集に「出会いとしての真理」が含まれていないのは、かえすがえすも残念である。ブルンナーの神学をもし一冊で代表させるとすれば、この書において他にない。戦後すぐに出版された弓削訳は入手不可能で、わがICCU図書館所蔵のものは、私が毎年授業の指定図書にするためぼろぼろで分解寸前である。それに比して「自然と恩寵」など、最近の訳で入手の容易なものも再録されているのは、いまだにこの神学者をバルトとの不幸な論争から理解させようという意図であろうか。教文館と編集委員の方々は、この際せめて「補遺」としてでも、ぜひこの名著をよみがえらせてほしいと願う次第である。

(もりもと・あんり)国際基督教大学教会牧師
(A5・四二〇頁・本体六二〇〇円(税別)・教文館)

教文館の本

キリスト教の一面

H・E・ハーマー編 宣教師シユビナー
岩波哲男 岡本不二夫訳 の 渚日記



近代国家形成期の明治に「キリスト教文化」を伝えるために来日した宣教師の見た日本の文化とキリスト教。●三、八〇〇円

青年の旅

鈴木範久著



確実な資料と豊富なエピソードを交えた評伝！クラークや新渡戸との出会いなど、多感な時代にいたる、多感な時代の内村の心の軌跡を描く。●一、七〇〇円

一日一生

内村鑑三著 鈴木範久・解説



「一日は貴い一生である。」内村鑑三の文章の格調を損なわないように努めながら、若い世代の人々にも分かりやすい言葉遣いに文章を改めました。●二、一五〇〇円

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
TEL.03-3561-5549
呈 / 図書館 価格(税別表示)